

おくりもの

浅川恵菜

おくりもの

ふと、目覚める。何時だろ？枕の下からケータイを取り出して時間を確認する。

うそ！8時！今日は日曜日なのに！遅刻じゃん！

がばっ！と起き上がって、同時に思い出す。

そっか、あたし、休職中だ・・・。

景気がいいころは良かった。売り上げも利益も、あたしが望んだように数値になって応えてくれて、上司から「虎の子」のように可愛がってもらった。報奨金もいっぱいもらったし、事実、あたしのお洋服はそれで買ったものばかり。でも、景気が悪化して、氷河期になったとたん、手のひらを返された。

毎日、お説教。そして、「経常利益」って言葉を、呪いのように繰り返し言われ続けた。

おかげで、自分でも怖いほどに、酒量が上がっていく。ストレスと、あと、眠れないこと、それからそんなことで悩んでいる自分が許せなくて、意識がある状態が恐ろしかったから。

初めて精神科に行ったときは、電車の中でも涙が止まらなくて。ドクターの前で号泣しちゃって、5分くらい、なんにも話せなかった。

売り場で卒倒して・・・。その日に「休職」を命令された。でもね、働いてない自分がイヤで、それから、こんなに忙しい日曜日を一人で切り盛りしているスタッフに対して申し訳なくて、だからこうして休職中なのに目が醒めちゃう。毛布にくるまって、膝をかかえる。

こんなあたし、いったい誰が許してくれるの？・・・わかんない・・・。

苦し紛れに、睡眠薬をがぶがぶと口に押し込む。そう。今のあたしは、深い迷宮の奥底でもがいてる。ここでは、月光すらみえない・・・。

そして。それはある日突然に訪れた。

「こだわることは、もう辞めよう？」

意味わかんない。あたしって、逃げてるの？ん～ん、違う。だって、人類は、暮らしやすい環境を求めて、アフリカから世界を放浪したんじゃない？

だからこれは、きっと本能が訴えてるのよ。ここまで来たら、それを信じてあげなくてどうするの？

月が変わる。季節は春へと動き始めてる。もう少ししたら、蝶が舞い始める。

そうね。今まであたしはさなぎだったんだ。きっと、春の暖かな日差しを受け、翼を広げて飛び立つ。そこにどんな空があるのかはわかんない。でも、きっと、飛べる。あれはきっと、神様からのおくりもの。

さあ、行くのよ。まだ見たことのない世界に・・・。

ゆきむし

学校に通うのは、もはや苦行以外の何物でもない。毎日おんなじ顔、毎日おんなじ環境。

退学せずにいたのは、あたしのくだらないプライド。でも、最早うんざりしてる。その証に、授業はゼーんぶ無視してた。嫌だけど、これを耐えれば、新しい世界に羽ばたくための翼が手に入る。

教師の話なんか聴いてなかった。それよりも、次の世界に向かうことしか考えてなかった。

でも、そろそろ期末試験。いつも眠ってた授業も、「ここ、テストで出すから。」って言葉で飛び起きて、ノートを取る。

どうしてこんなにあたしは不自由なの？

わかんない。でも、内申書に「授業態度」ってのがあんだけど、そんなの、席次が良ければなんにも問題ないでしょ？

ウチに帰ると、畑のはっしこでゆきむしたちが踊っていた。

いいよね。あんたたちはそれだけで評価される。

その中から一匹をそっと掌に捕まえる。すると、それまでふんわりとついていた、純白の衣を脱いでふわりと、黄昏の空に浮き上がる。

・・・不自由なのは、あたしだけって、思い込んでいたのかもしれない。だって、ゆきむしは翼をもがれても、また宙に舞う。

翼。そう、あたしが考えてるよりも、もっと簡単に手に入る物なのかもしれない。

ねえ？そうでしょ？

ゆきむしは何も答えない。ただ、生涯最高のダンスを踊る。そうか。あたしはなんの努力もしてなかったのね？

もう冬が来る。ゆきむし達は雪の気配を告げて、天空に登る。

・・・。軽くため息を付く。

がんばれ。あたし。ニンゲンなんだから、もっと強く生きろ。

グッドモーニン！

朝は絶対にモカ。キリマンとかも好きだけど、圧倒的に香りがいいから、これなら寝ぼけたアタマもすっきりするじゃん。

恋人は、まだベッドの中。あたしは眠ってるカレを起こさないように、腕の中からそおっと抜け出して、コーヒーをたてる。

部屋中に香りが立ち込める・・・。

「ねえ？いつまで寝てるの？もうお昼になっちゃうよ？」

「ううーんんん・・・。」

嫌そうに、毛布の下でもぞもぞしてる。あたし、いたずらっぽく、そのまぶたにキスして、「ねー、コーヒー冷めちゃうよ？」ぎゅっ。

きっかけはなんだったんだろう？ カレは取引先の営業さんで、あたしと顔なじみになるのには、そんなに時間は入らなかった。いつもふざけてばかりで、しかも、どこまでジョークでどこから本気なのかわかんない。でも、仕事になると、沈着冷静、頭脳明晰で、とってもあなどれない男子だった。

そんなカレに、あたしはいつの間にか憧れるようになってた。

そう、あれは取引先さんたちとの合コンだったかな？なぜか、あたしの隣にカレが座って、二次会行く、って話が出たとたんに、テーブルの下であたしの膝にそっと手をおいて、瞳を見つめて微笑んだの。

フォーリンラブ。違う。今まで気づかないふりをしていたあたしの気持ちを、見せつけられたんだ。

あたしは、速攻、カレにはまってしまった。もう、この人がいなければ、生きていけない。

なのに・・・。

ある日突然に、メールもケータイもなくなってしまった。どおして？・・・わかんない。

それからは、孤独に耐える日々が続いた。あんなに愛してくれてたのに、なんで振り向いてくれないの？どうして、気にかけてくれないの？もしかして、あたしが押し続けないと、あなたって、消えてしまうの？

スタバでソファに座って、モカを飲む。あたしがたてるコーヒー、いつも、「美味しいね」って云ってくれたのに・・・。

こうして、お店にいる人たちを見ていると、余計に寂しくなってくる。でも、部屋に帰っても、あたしを待っててくれる人はいない。お願い。誰かあたしを抱きしめて！

気が付くと、海に面している公園にいた。そっか。ここ、よく二人で来たよね・・・。振り向

くと、摩天楼の明かりが曇った空に反射して、そこだけが輝いていた。あたしはそれをぼんやりと見つめる。きれい……。ぼーっと見つめる。

知らないうちに泣いてた。ってゆうか、涙がぽろぽろとこぼれて、それが夜風に晒されて、頬があまりにも冷たいからやっと気が付いたの。

もう、手放そうよ……。いつまでもとらわれてたら、死んじゃうよ？

電車に乗ると、嫌でもカップルが目につく。でも、なんか平気になってた。だーれもない部屋に帰っても、案外ふつーだった。

グッドモーニン。明日目が醒めたら、あたしの為にモカを淹れよう。そうして、あたしは生まれ変わるの。

グッドモーニン！新しいあたし。

グッドモーニン！そう、一人でも大丈夫！

……。でもね。優しい思い出だけは、忘れないわ……。

・・・。葬儀が終わったのに気が付くまで、いったいどのくらい時間がかかったんだろう。

お母さん。大好きだったのに、私はそれを伝えることが出来なかった。それは、お姉ちゃんが早く逝ってしまったから。だって、10歳なんて、あまりにも早すぎる。でもその時の私は、今までお姉ちゃんが独占していたお母さんの膝を、私の物になるっていうことの方がうれしかった。

でも、物事はそんなに上手くはいかなかった。

私には3つ下の妹がいた。自由になりたい、抑えようが無いくらいに、その想いは激しかった。でも、この家を継ぐのは私しかいない。だって、妹にこんなつらい思いをさせたくない。そんな覚悟を決めたのは、15歳の時だった。

云われるがままに結婚をして、子供を3人産んだ。でも、愛せなかった。だって、私は、お母さんに愛してもらった記憶がない。だから、その方法が分からなかった。

子供たちは、私が知らない内に好きな方向に飛び立って行った。翼を与えたのは私だ。

いや。違う。私が見ることのできなかつた世界を、見てきて欲しかったのだ。

仏壇に向かって座る。遺影のお母さんは、戸惑っているように見えた。葬儀の際に供えられた、胡蝶蘭が咲き誇っている。

お母さん・・・。こんな風にならないと、私たちは向き合えないのね・・・。

静かにお経を読み上げる。だって、逝ってしまったお母さんに捧げられるものは、他には何も無い。

ねえ、今年は大変だったわね。嫁に行くはずがないと思っていた子が、遠くに嫁入りして、もう一人は2人目の孫を産んだのよ？末の子はまだまだバリバリ働いてる。

これを幸福というのかしら？・・・わからない。でも、私たちの血は、確実に未来につながっている・・・。

そこから見える景色は、どんな感じなの？うふふ。

もう、あと10年もすれば、私もそこに行くのよね。

今は、それまでの、休憩時間なのかしら？

南無妙法蓮華経・・・。

お線香の香りが、いつまでも漂ってた・・・。

12月にしちゃ、暖かいな……。ユイは晴れ渡った空を見上げて、胸の奥でつぶやいた。

ああ……。

内定が出ている友達が居るって云うのに、ユイはいまだにどのカイシャにもいい答えはもらっていなかった。

履歴書、いったい何通書いたんだろう？それに、PCもモバイルでも、応募出来るところには、全部登録したのに、なんの返事もないなんて……。でも、考えてみれば、そんな友達って、みんな男子。なんで？女子っていうだけで、不利なわけ？

ベンチにペタン、と座り込んで、もうどれくらい時間が立ったんだろう？目に映る光景は、まるでつけっぱなしのTVの画像みたいに、淡々と流れていく。

いい学校を出て、いい会社に入って、キャリア積んで、いい妻になって、なーんて、いつもお母さんが行ってたなあー。でもさ、それって、今は幻想でしかないってこと、どうしてわかってくれないんだろう？

ユイは、ただただ、イイコでいることに励んだだけの高校時代を思い出していた。

「あんたの為なのよ？」っていう母の言葉に従って、中学はもちろん、高校だって必死で勉強して、塾に行って、予備校通って、難関っていわれる大学になんとか滑り込んで、普通ならみんなキャンパスライフってやつ、楽しむんだろうけど、世の中がこんな風になってしまったから、2年の時から就職活動してたのに……。

両親の苦労は、間近で見てたから、そんなこと云われなくたって分かってる。でも、ユイはただただ「イイコ」でいることで、両親に愛されたいだけ、だったということに、ようやく気が付いていた。

バカだよな。女優じゃないんだからさ、もっと自分が生きたいように生きればよかったのに……。

視界の端に、葉を全部落としきった木があった。今年も変な秋だったから、いまだに銀杏なんか、黄色い葉っぱをつけてるのに、こいつは丸裸。でも、じーっと見ててユイはそれがなんなのかに気が付いた。

桜だ。

そっか、ここって、この街の開花宣言を、出すかどうかを決める桜がある公園だ。そう気が付いてから、枝葉を見ると、裸になった枝に小さい、でもはっきりとした芽をたくさん見つけた。

そんな桜が、ユイには哀れにしか見えなかった。だって、季節がやってきたら、心の準備なんかできてないのに、否が応でも花を咲かせなきゃいけない。そんなの、自分だったら無理。

バッグを探って、ライターと、煙草を取り出す。これは、ユイなりの、ささやかな反抗だった。でも、メンソールしかダメ、って時点で、バカよね……。

……でも、桜は……。

環境が整ったら、その時に、花を咲かせればいい。

なーんだ。簡単なコトじゃない？ライターの灯を見つめながら、ふと思う。

あたし、この灯を見れば、それで安心する。ホントは煙草なんていらぬ。ただ、両親に反抗してる、っていう事実が欲しいだけ。

そーゆーの、「莫迦」っていうんだっけ？

ユイはライターに灯を灯して。

そこで辞めた。

そうよね。季節がめぐってきたならば、ユイも花を咲かせなければいけない。でも、そんなこと、考えて見れば、難しくも何ともない。

深呼吸して、枝を見つめる。

そお。目指せや春を。

その先に多分、今よりオトナになったあたしがいる、から……。

満員電車。

好きじゃないけど、持病のためにクリニックに行かなきゃいけないから、しかたがなくそこに体を押し込める。も一顔から汗が吹き出しちゃって止まらない。お化粧なんてするだけ無駄。真冬だって云うのに！

そりゃね。歳が歳だから、更年期とかっての、仲良く付き合っに行かなきゃなんないってのは、分かってる。イライラしやすいのもそのせい。でも、それにしたって、今どきの子供って、なんなの？

電車から降りて、階段を下っていると、大きなランドセルをしょってるガキどもが、ちんたら歩いている。あたしは予約の時間が迫ってるの。お願いだからさっさと歩いてよ！

なのに、なんかTVの話しなんかしてて、のんびんだらりんと歩いている。

ムカ！

「あんたたち、ささっと歩くか、端っこに避けないと後ろから押されてすっこばされても文句言えないってばっ！」

つい、うっかりと叱りつけてしまう。ガキどもは、なーんで見ず知らずのおばちゃんに叱られたのかわかんなくて、視線がきよろきよろしてる。

・・・まったくもう！いまどきの母親って、ど一ゆ一膳をしてんの？

信じらんない。あたしは、「世間の迷惑にならないコト」を最優先に躡けてたのに！

クリニック。まあ、産婦人科だけど、そこ更年期障害の患者さんと、不妊治療受けてる人とが半々。そのせいか、待合室の雰囲気はピリピリしてる。

子供なんて・・・。産んだってなーんにもイイコトない。そりゃさ、ママになった瞬間は嬉しい。でも、すぐに慣れない子育てに追われて、それもなにひとつ自分の思い通り、理想通りになんか行かなくて、「楽しい」なだなんて能天気なこと考えられる「莫迦」なんているんだろうか？

ようやく小学生になってくれて、あたしもパートに出られるようになって、これで自分の時間ができるのかな？って思ってたのに、学校やマンションの役が回ってきちゃうから、自由なんてありゃしない。

本当の意味で「子育て終了」するのは、子供たちが結婚してくれる、ことなんだろうけど、あの子たち、そんなこと想像したことないわよね。

「大谷様、診察室へどうぞ。」ようやく順番が回ってくる。でもさ、毎回思うんだけど。

ドクターって、更年期の患者って、すごいぞんざいに扱ってる。確信。

だって、不妊、とかだと高度な治療したりして、儲けになるじゃない？でも更年期さんは、ちょいちょいと問診してさっさと投薬の用紙に記入して、「はい、お大事に。」

・・・思いやりもなんにもあったもんじゃない。そら、男のドクターに更年期の辛さ分かれよ！っていうほうが無理かもしないけど、あたしだってれっきとした患者=お客様よ？あーハラたつ。

電車で揺られながら、今夜の献立考える。どーせ、なに作ったて、物も云わずに食べる家族って許しがたいけど、それが主婦の勤めかな？って思ってあきらめてる。

・・・なにせよ。家族が元気ならよし、としないと。万が一、あたしが要介護になったとき、どの子供も振り向いてくれない、ってことはないように恩を売っておかなきゃ。

あー、やだやだ。

スーパーの特売、豚肉だったな。あとはお店で考えよう。

主婦と云う名の奴隷は、そうつぶやきながらお買い物かごを腕にかかえた。

「ねーままあ、サンタさんにおねがいしてくれたあ？」

みいなのはまのエプロンにしがみついた。

「もー！ままはご飯作ってるの！みいな、いい子なんだから邪魔しないで！」

ぐずぐずぐず……。エプロンの端っこ掴んだまま、キッチンの床に座り込む。

「だってえ、あーちゃんもよしくんもみーんなもってるんだよお？」

新しいゲーム機。

「あのね、いいこにしてないと、サンタさん、お願い聴いてくれないの？」

みいなのは眉間にしわを寄せて、そのまんま動かない。

ホントは。そんなのほしくない。でも、みんながもってるのに、じぶんだけないのがヤなの！

みいなのは、だって、キティちゃんのハンカチとか、ピンクのかわいおようふくのほうがいい。

でも、みんなとちがうのって、なんか、ヤダ。

そーゆーの、なんていうのか、みいなのはしらない。みんなとおんなじなのはイヤ。でも、みんなとちがうのもイヤ。もうちょっとおおきくなったら、それがどういうことなのかわかるかもしれないけど、だって、ヤなものはヤだもん！

「ねーぱぱはあ？」

「さーね。遅くなるって云ってたから、早くご飯食べちゃいなさい。」

晩ごはん、オムライスと、みいなのキラいなニンジンの入ったクリームシチュー。

「ニンジンさん、やだ。」

「や、とかって云わないの。細かくしてあるから、我慢して！」

・・・ままって、どーしていつもこんなこというの？

「ほら、ゆうくんはちゃんと食べてるでしょ？みいな、お姉ちゃんなんだから！」

おねえちゃんって……。なんかすごーいイヤなコトバ。だって、なんでもかんでも、

「おねーちゃんなんだから！」ってゆーし、なんでもかんでもがまんしろって……。すきで「おねーちゃん」になったんじゃないやいっ！

だって、ゆうはちびっこだから、なーんにもかながえずにたべてるだけ。なのに、どーしてそれがほめられるの？

・・・でも、こんなにちいさくなってるから、ニンジンさんのあじ、わかんない。だからって、ままのいうとおりにたべるの、なんかイヤ。

ムツとして食事をする。ママはそれを見て、サンタさんにちゃんとお願いしなきゃ、って思う。そうよね。いつもいつも、「おねーちゃんなんだから！」って云いすぎたかも。生まれたばかりの頃は、アトピーとかも酷くって、結構悩んだけど、成長とともに穏やかになってくれて、今は、全然普通の女の子になったんだもの。

「ねえ？あなた？」

「なんだよ。」むっとしてネクタイをほどいてる。

「みいなのお願い、訊いてあげたいの。」

「・・・普段、かまってやれたないもんなあ・・・。俺だって、みいなやゆうが安心して眠ってるの、見ると安心するよ。」

めずらしくしく夫が語る。うふふ。ビール、一本おまけしてあげるわ。

・・・クリスマスの朝。

はっと目が醒める。

あっ！

くつしたのなかにゲーム機はいつてる！

「ままー！！！」

「なあに？」

「サンタさん！ちゃんときてくれた！！！」

「そお、よかったわね？」

ぎゅっ、ってままにしがみつく。

「ぱぱは？」

「もうかいしゃにいっちゃったの。」

「そっかー・・・。」

・・・えへへ。みいなのは胸の中でいたずらっぽく笑う。

みいな、サンタさんがだれなのか、しってるもん♪

ハッピークリスマス

・・・こんなはずじゃなかったのに・・・。

真由子は、クリスマスイルミネーションで飾られた街路樹が並ぶ歩道を歩きながら、ため息をつく。

そう。それは、辛すぎる仕事からの、逃げ、もあったかもしれない。でも、いい人と巡り合って、幸せな結婚をして、かわいい子供に恵まれて・・・。なーんて夢を抱いてた。

結婚はね、出来たわ。でも。

いつまでたっても妊娠しなかった。たとえ結婚ができて、べびが出来なきゃ、負け組。でも、ようやくできたべびも、そのまま流産して、それからまた頑張ったけど、その子は真由子のお腹の中で逝ってしまった。

これって、どんな代償を払えばいいの？私、そんなに悪い女だったの？

でも、神様は、それだけでは許してくれなかった。

朝食の後片づけをしている時だった。手が滑った、としか云いようがない。結婚決まって、二人でデパート梯子して、ようやく選んだお茶碗。

それがつるん、と手をすべって、やけに切ない音をさせて割れてしまった。

「ぱりーん・・・」夫のお茶碗...

その日の夕方だった。いきなり電話が鳴った。

「はい。高岡ですけど？」

「こちら、xx病院の救急センターです。高岡博様は、奥様のご主人様ですか？」

・・・えっ？心臓が高鳴る。

「あの、どういったご用件で・・・？」

「実はご主人様が・・・」

ぱりーん・・・。心の中で、あの音が響いていた。

真由子はカギとお財布だけを持つと、家を飛び出した。途中でタクシーをつかまえて病院に駆け込んだ。

受付で真由子が名前を告げると、ドクターとナースが出てきた。

「・・・大変残念ですが・・・」

後は、なにを云われたのか覚えてない。ただ、涙は一つもこぼれなかった。

そうしてようやく全てが終わった後、一人ぼっちのマンションのリビングで夜明けまで号泣した。

「ただいまー。」

奥の方で、ちりりと鈴が鳴る音が聞えた。

「にゃうー」ととととと猫がお迎えに来る。

「ヤマト？いいコにしてた？」

「みゃう！」

ヤマトはほれほれするくらいにキレイな黒猫だった。だから、ヤマトなの。

博からのクリスマスプレゼント。あの時の夫の笑顔、覚えている。

ヤマトはしっぽをふりふりしながら、真由子をリビングまで誘導した。真由子は目じりを下げて、そんな彼に従い、食卓のテーブルにケーキの入った箱を置いた。それから、冷やしておいたシャンパンを出して、夫の席にグラスを置き、半分までそそいで、ふと思い出した。

そう。あなたってそんなに呑めなかったわね。くす。

真由子は自分のグラスにめいっぱいそそぐと、箱の中からイチゴのショートケーキを一つづつ、夫と自分の席に置いた。

。

「かんばーい」

グラスが、チンッ！と音をたてる。すると、ヤマトが真由子の膝に強引に乗ってきた。

「にやううう??？」

「忘れてないわよ。ほら！」ケーキの生クリームを指ですくってヤマトに差し出す。

ヤマトは目を細めて、必死でクリームを舐めてる。うふふ。こーんなクリスマス。もう5年？

不幸中の幸い。そんな理由で、もう真由子は、自分とヤマトの生活だけを守っていけばいいだけの身分になっていた。

「みゃああ??？」

なんて喰い辛抱さんなの？真由子は意地悪く笑って、今度はヤマトの鼻先にクリームを塗りつけた。

彼は不信な表情を浮かべて、必死で鼻先を舐めてる。うふふ。かわいい。

ハッピーハッピークリスマス。

こんな生活、いつまで続くのかしらね？でもね、ヤマト。あなただけは、私が守ってあげる。

メリークリスマス。天国のあなたへ・・・。

がんばれ！ニートな主婦！

最近ふっと気が付いた あたしってニート？主婦！
やっと自覚したかって 旦那
違うよ！ ベリー族な主婦！

でもね なんでもやりっぱで 放置
ゲーム熱中してて お鍋こがしちゃったりーw

がんばれ！ ニートな 主婦！
力ぬけ！ のろまな 亀です
いざ行け！ 特売日だ 主婦
忘れんな！ コミックスの発売日～♪

がんばれ！ アラフォーな 主婦！
目指すんだ！ ハンターランク シックス！
いざゆけ！ ヨドバシカメラ
忘れんな！ サイン会な有隣堂～♪

(セリフ)

腐女子じゃないよー？ 腐通だもーん☆
コスプレ？ やってもいいの？ 川崎ハロウィン行っちゃうよー？

がんばれ！ ニートな 主婦！
やめとけ！ ガキンちょとのギルカ交換
いざ行け！ 特売日だ 主婦
忘れんな！ 週ジャンの発売日～♪

がんばれ！ アラフォーな 主婦！
目指すんだ！ アイテム コンプリート！
いざゆけ！ 聖地アキハバラ
忘れんな！ サイン会な有隣堂～♪

(セリフ)

腐女子じゃないよー？BLきらいだもーん☆
コミケ？ いってもいいの？ ゆりかもめ乗っちゃうよー？

ちゃっちらちらちゃ！ ちゃらちゃちゃちゃー！
ちゃっちらちらちゃ！ ちゃらちゃちゃちゃー！

がんばれ！ニートな 主婦
がんばれ！アラフォーな主婦

えんどれすっ！くりかえしー！

晴れ渡った冬の黄昏の空に、ナイフで切り裂いたかのような三日月が輝いていた。隣に最上のダイヤモンドのような、美しい金星を従えて。

このビルの、もうこれ以上は登れない場所。ここから見る光景は、あまりにも美しく、そして同じくらいに虚無だった。

風が冷たい。だけど、そんなのもうどうでもよくなっている。背中に届くまで伸ばしていた髪、デパートのトイレで切って捨ててきた。それだけが、自分を現世に繋いでいた糸。でももういらぬ。

ふと振り返ると、泣きじゃくっている自分がいた。
行かないで、って叫んでいる。

行かないでって？

違うわ。帰るだけ。ここに存在しなきゃいけない理由なんて、なにも無いんだもの。

ずーっと背中に隠していた翼をひろげる。純白の、どんな鳥よりもたくましく大きな翼。軽く羽ばたいてみて、ちゃんと飛翔できることを確認する。翼から抜けた羽毛が、木枯らしに巻かれて舞い踊る。風花みたいね。

なにを目指して羽ばたけばいいのか、もう分かっている。もう悩まない。もう迷わない。

ふわり。紅いヒールのつま先が宙に浮く。

月に帰還した姫君は、本当は分かっていたのよ。そこにこそ、本当の自分のためだけの、場所があることを。それと同じ。だから、もう泣かないで。自分を騙してまで、ここにいらなくてもいい。

もう一回羽ばたく。風が、翼を持ち上げて歓迎してくれる。

心配しないで。気が向いたら、またここに来るわ。たぶん、いつか・・・。

窓越しに空を眺めると、厚く曇った空に、重い雪雲がぶら下がっていた。たぶん、1時間もしないうちにボタン雪が舞い始める。ばーちゃんは痛む膝をさすりながら、雪かきの事を考えていた。

じーちゃんは、ばーちゃんよりも膝が悪くて、おまけにヘルニア持ちだから、あんな大変なことをさせるわけにはいかない。溶け残った雪が凍ってるから、そこで滑って転んだら、大けがだ。

やれやれ……。先代から引き継いだこの家、もう築100年近い。おかげであちこちガタがきてて、真冬日が普通にある山里に住んでいるのに、家の中は、こたつ以外に暖かい場所はない、と言ってもよかった。

これでも、晴れてくれりゃ、縁側がちったあ暖かいんだけどねえ……。

「にゃーおおお！」

ありゃま、おこたの中のおちびちゃん、蹴っ飛ばしちまったよ。

「悪いねえ、トラや。さ、おひざにおいで？」おこたの中で、すねている猫に声をかける。

「おーいトラ？ばーさんなんかよりも、じいじのところにいで。」

じーちゃんは横になってTVを見ながら、甘い声をかける。茶とらに白の美人さんのトラは、ばーちゃんをちら、っと見て、ついつとじーちゃんのそばに行った。

息子と嫁は、ここから遠く離れた街に家を建てて、同居しろ、と言ってくる。

そんなこたあ、ごめんだ。そうしたら、誰がこの家を守るんだい？それに、畑も田んぼも放り出すなんて出来るはずがないじゃないか？だいたい、ご先祖様のお墓参りにもこないクセに、若いもんは云いたい放題だ。孫はかわいいさ。でも、大きくなれば、ばーちゃんたちなんか、見向きもしなくなるもんだ。

トラは初めはご飯をもらいに来るだけの猫だった。でも、霜が降りるころになると、寒かろうな、と思っておこたにに入れてやるようになったら、いつのまにか家族になっちまった。そりゃ、ニンゲンの言葉は話しゃしない。でも、冷たい布団の中でもトラの暖かきで、ぐっすり眠れるし、じーちゃんとケンカしても、いつのまにやら二人してトラを甘やかしてた。

「猫はいいねえ。」

「そりゃ、わしへのイヤミかい？」TVを見たままで答える。

「あはは。ちがうよお。いつでも好きなところに行けて、ご飯いっぱい食べて、じーちゃんに抱っこされてさ。」

「やっぱり、イヤミじゃ。」

「ニンゲンなんかよりも、ずーっと信頼できるよ。な？トラや。」

「わしよりもか？」むっとしてる。

「歳を取った、ってことですよ。ふふふ。」　トラはじーちゃんにぴったりとくっついて、のび

のびと眠っている。

気が付くと、雪が舞い始めていた。どうやら、雪かきは明日の朝イチだねえ。そうだ、今夜は鍋にしようかね。たしか魚の切り身があったから、入れちまえば、トラのごちそうにもなるしね。

もう日も暮れた。長いような、短いような人生。そりゃいいことも悪いこともあったさ。でも、今こうやって、つましいけど穏やかな日々を送っていけるのは、もしかしたら、猫神様のご利益かもしれないねえ。

これ以上、欲しいものなんてありゃしない。どうかこんな日々が、お互いを看取るまで続けてくれますように。

「よいしょっと。」

ばーちゃんはゆっくりと台所に向かった。

ごめんなさいごめんなさい

朝、鏡の前で気が付いた。あー！あたしタベ、メイク落とさないままで寝ちゃったんだ・・・。サイテー・・・。あう、それより何より、胃がキモチワルイ・・・。かみさまー！もーあんなに呑むの辞めます！だから勘弁してください！！

ヨーグルト一口食べて、ガスター飲む。仕事・・・休んだら刺されるよなー。いあ、マジで。大体、昨日、合コンなんか行かなきゃよかったのよ・・・。だってさーどーせ頭数そろえる為だけだったんだもん。

・・・でもさー。カレシいない歴、10年超えちゃうし、それで30になっちゃうの、女子としてイタくない？そんなこと考えてるあたしに、職場の後輩から、

「キレイ系のおねえさま、呼んで欲しいって云われてるんです♪」なーんて云われて、その気になっちゃうあたしって、バカだー・・・（没）

もーいいや、このままマスカラだけ直してグロス塗って、出勤しちゃお・・・。

通勤電車。満員。なんかもー、乗客のつけてる化粧品、シャンプーやら柔軟剤の臭いが、もの凄、キツ！おまけにトレインチャンネルの、アルコールのCM見るだけで、胸のあたりがもやもやしちゃって、もーほんとに、かみさまに土下座したくなる。

「せんぱーい、タベ大丈夫だったですかあ？」む！、昨日の小悪魔だ。

「あー、全然OKよ。楽しかったわー！また呼んでね？」

「はい！」かわゆい笑顔。でも、ハラの中じゃ、なに考えてんのかわかんない。こいつも、あたしの婚活の敵だ！

自分のPCでスケジュール確認して、黙々とキーを打ち、電話取って、なぜか来客のお茶出しやらされて・・・。

でも、お昼頃には、胃の気持ち悪さが消えてた。あー、これでご飯食べられる・・・。

「ねー、レイちゃん、お願いがあるの？」

コンビニで買ったおにぎりを、デスクでもしゃもしゃもしてたら、同期のアイリが話しかけてきた。

「あに？」

「今夜さー付き合ってくんない？」

「なにに付き合んの？」

「合コン！ ドタキャンされちゃってさー、人数足りないの。」

・・・また、数合わせ???

「今度さー、イタリアンのランチ奢るから！ねっ！おねがーい！レイちゃん以外に頼める女子いないのー。」

「えー？だって、あたしお洋服、これしかないのよ？」

「いいじゃん、レイちゃんいつもエレガント系だし！今日の男子、銀行マンとか公務員ばかりだよお？」

お！おいしそう・・・。

「・・・わかったよ。リスケすればなんとか時間出来るし。」

「いやーん！だからレイちゃん好きー！」

いあ、あんたに好かれたかないケドさ。

っていったにもかかわらず、資料プリントアウトしてたら、待ち合わせに遅れちゃった。てきとーにメイク直して、コート着て駆けつけた。お店は結構おしゃれな居酒屋。すでに男子が4人座ってた。

「ごめんねー待たせちゃったあ？」アイリ、めっちゃかわゆい声でしゃべる。しかし！他の女子がコート脱いだ瞬間、あたし凍りついた。

ちょっとー！！ あんたたち、ちょー勝負服じゃん！ひどいよおお！

なんかさー、結婚式の披露宴に部屋着で参加しちやっただくらい、ギャップがある・・・。ムカムカムカ！！

もーいい。どーせ、あたし数あわせだし。吞んでやる！

「かんぱーいい！！」

もー一気にジョッキ半分開ける。他の女子はかわゆくカクテルとか吞んでるけど、もーカンケーない！

「あーレイちゃんだっけ？すごいけるクチ？」

「そーなのよー、レイってザルだし、酔わないのよ？」

アイリ・・・許さん・・・（怒）

あー・・・。終電だあ・・・。またやっちゃった・・・（涙）。

時間を確認しようと思って、コートのポケットの中のケータイ探る。

ん？なんだ、これ？

紙切れに指が触れる。取り出してみると・・・。名刺だ。ええっ！

この人、一番イケメンだった人だ！あ、手書きでメッセージ！

「飾らないところがみんなよりかわかったよ♪」

・・・ふええええ・・・。メルアドも添えてある・・・。

あー、かみさま！！！ ごめんなさいごめんない！あーんど、ありがとうございます！！

・・・んでも端から見て、あたしって変人だろーなー。よっばらいで、名刺見てきゃーきゃー云っちゃって・・・。

やっば、イタイ？

うー、死に・・・たくない！

ゆるやかな殺意

「ぐごごごごおおおお！うががががががつああああ！」

うるさい。

旦那のいびき。百合子は布団の下から腕を伸ばして、旦那の鼻をつまんだ。

「んんんっ、うごおお」

旦那は、ぱかん、と口を開けると大きくため息をついた。やれやれ。つまんでた指を離す。

友達にこの話をすると、

「えー？あたしたち、寝室別にしてるわよ？」ってたいがい云われる。

だけどー。ウチは2LDK。もう一つの部屋は物置にしてるから、最悪、百合子はリビングで眠ることになる。それはなんか悲しいから、避けたい。

もうさ、子供も結婚して家を出たんだし、そういう子供たちに結婚式で

「これからは夫婦仲睦まじく、日々をお送りください。」とかって言われて。

確かにね、友達の中には「熟年離婚」した人もいる。・・・それも、アリ、よね。でも、ウチの旦那、ご飯を炊くこともできないんだもの。そういうのを見ると、なんだか可哀そうになっちゃう。

妻として、それは云ってはいけないかもしれないけど・・・。

お願いだから、あたしより先に逝って。

百合子が先に逝ってしまうと、日々の食事どころか、お洗濯やお掃除なんかできっこない旦那の事を考えると、そんなの無理。そりゃ、いびきとか、呑んでくれて帰ってきて介抱させられたりしたけど、いまの百合子があるのは、そーゆー迷惑な旦那が、必死で働いてくれてから、ってあるもの。

いあいあ。それは分かってる。でも。

「ぐうぐうぐうぐう！うごごごごごごっっ！」

はあ・・・。も一いつか殺してあげる。ちゃんと保険はかけてあるから。

「ふがあっ、うむむむむ！ すぴー・・・。」

あたしがなにを考えてるか、分かんないでしょ？まあいいわ。鼻をつまんでやって、微笑む。

置いてけぼりにはしないからね？

いじっぱりな笑顔

アイツ……。幼馴染で、よくケンカもしたけど、あたしたちは友達っていうよりも兄妹に近いくらいで、だからきっと、あたしがアイツ、ユウの事をマジで好きだなんて、誰も信じないし、ユウだって本気になってなんか、くんないよなー。

行きつけのコンビニのイチバン目立つ場所に、カワイイチョコがいっぱい並んでるのを見ながら、ぼーっと考える。

「おい、マイ？」振り向くと、サンドイッチとコーラを持ったユウがいた。

「なんだよ？お前でも誰かにチョコやんの？」

「違うもん！見てただけ！」

「そらそーだよな。剣道部の女子にバレンタインなんて、似合わねーしな！はは！」

お前でも、ってなによ！あたしだって乙女なんだもん！

幼馴染のひいき目、かもしないけど。ユウはあたしよりちびすけだったのに、いつの間にか背が高くなって、高校に入って即、バスケット部でエースになんかになっちゃったから、ムカつくくらいに女子にモテル。そーゆーアイツのこと、中学のころから、イライラして見てて、他の女子がユウに告るときに、その女子の付添いとかもやらされたりして、そーゆー自分にもムカついてた。

だって、ユウ、保育園の頃なんかいつも泣いてたし、あたしたちがケンカしても、絶対にあたしが勝ってたもん。そーゆーの全部知ってるんだもん！

でも、3年になったら受験一色になっちゃうから、そんな、バレンタインとかだなんて浮かれてる場合じゃなくなっちゃうよね……？

2月になると、どんどん憂鬱になってきて、イライラするから、ついつい稽古の時に、マジで竹刀を打ち込んでしまう。

「先輩、最近強くなりましたね！？」無邪気な下級生に、あたしの気持ちなんてわかるはずない。

教室でも、休み時間になると女子はチョコの話で盛り上がってて、けどシカトすんのも変だから、テキストに話あわせてて……。

コンビニのチョコ売り場、どんどん商品がなくなっていく。友達と遊びに行ったときにデパートのチョコ売り場通りがあったけど、キレイでカワイイチョコがいっぱい並んでる。

……あたしって、こんなに情けない奴だったけ？ん～ん、違うもん！

2月14日。朝イチでコンビニに行った。んで、ユウが登校してくる通学路ですっとぼけた顔して、電柱によっかかった。

「あれ？マイ、なんでこんなところいるんだよ？」

ユウは本当に、なーんにも考えてない。

「えっとさ、」なに言えればいいのかな？

あたし、いきなりユウの右手をつかんでチロルを一つ握らせた。

「・・・あんとき、お前、怒ってるのかって思ったよ。」

図書館の学習室。

「違うもん。笑ったんだもん。」顔が熱くなる。

「あははは！」

「こら！静かに！」先生に叱られる。

「あれ、笑顔って云わねーよ？どっちかつーと泣きそうだったじゃん？」

「・・・今年は、ちゃんとしたチョコ、あげるから。」むか。

「お前、ホント、意地っ張りだよな。」

ユウはそう云って、机の下であたしの膝をなでてくれた。

火遊び

それがどんなに残酷なのかは、知ってるつもりやってん。せやけど、爆竹に火いつけた瞬間のあの楽しさの為だけに、かえる捕まえよったし、爆竹こうために駄菓子屋通ってってん。

今、あたしがやってることも、あれとまったく同じやねん。あんたに奥さん居てることは、織り込み済みや。それがどんなに不道德なのかはわかってるけど、おうて美味しいもの食べて、ちょっと火遊びして。そういう、ガキの遊びの延長でしかあらへんやんか。

あたしはあんたに離婚してくれ、なんてゆうたこともないし、そんな気いもあれへん。ただ、この楽しい火遊びをつづけたいだけやねん。

あたし、あんたに感謝してんのんやで。こうやっている間は、自分が「オンナ」やったことを忘れることはあれへん。次おうたとき、

「きれいやな」云われたいだけの為に、結構努力してるし、たったそれだけの為に、幾ら投資しても、惜しい、とおもたことあれへん。

せやけどな一。なんでオトコいう生き物は、小心なんやろな。そんなこと、考えてへん、ゆーても、だんだん距離をおきたがる。

べつにあたしも、それに依存して生きてるのと違うから、またかいな一、くらいにしかおもわへんけど。

多分、オトコよりンナのほうが、本能的な生き物やねん。自分に正直に行きたいだけやねん。せやけど、オトコは誰もかれも、「ヨメさんこわい」と思てるくせに、楽しい事だけしたいのん。なんつーしょーもな一い生き物やろ。

オンナは結婚したら、自分の幸せを守ろうと必死になる。それがえーとかあかんとか、云う資格、あたしにはあらへん。せやけど、旦那が余所向いてること、きづかれへんのやったら、それ、自分にも責任あるとちがう？

まあ、どないなっても、あたしらには先はあれへんな。さよか一。ほなら、あたしから消えるから、あんたは好きな家に帰ったらええやん。ほんで、嫁さんにやさしゅうしてやって、元の鞘に収まればええねん。

あたし？さーね。明日になったら、何かかわるかもしーへんしな。

今どきの、いわゆる「ベリー族なママ」ってどういう躰してんのかしら？

電車の中では大はしゃぎで、駅に降りると、階段いっぱいになって、他人の邪魔になるーがどーしよーが一切気になんない。おまけに、そーゆーママたちは、こぞって着飾って、自分の子供にも「コスプレ？」って聞きたくなるようなお洋服を着せてる。

少子高齢化、とかって言ってるから、そういうママも、社会的にも必要かもね。でも、迷惑極まりないんですけど！

けどまあ、あたしだって、飼い猫の為だったらなんでもやっちゃうし。批判なんてできないかもね。

こないだいった和食屋さんで、あまりにもお刺身が美味しかったから、おしぼりの入ってた袋に一切れいれて、でも、持って帰るの忘れちゃって、あれ、お店の人がどう思うのかって考えると、もう二度とあのお店にはいけない（笑）

長年、生きてきて、恋人に求める第一条件は「猫好きであること」。ルックスとかそんななんでもいい。細かい指定事項はいっぱいあるけど、あたしんちのにゃんこが「この人キライ」って云ったらそれまで。

あのね、猫って孫なの。どーんなに我がままでも、かわゆい孫の我がままなら、聴いてあげたいでしょ？まあ、世間の人間は、「莫迦じゃない？」って云うかもしれないけど、うちのコかわゆいっていつてくれなければ、どーんなハンサムでもいらないの。

この世はお猫様のため。だって、連れ子を愛せない男子なんて、許せないでしょ？

さあて、今夜はまぐろかな？かつおのほうがいいかな？なににせよ、お猫様が喜んでくれなきや☆

久々にママ友達と逢って、ランチしてると、話題がだんだん変わっていくのよねー。

初めは最近のTVとか、ファッションの話なのに、そのうち自分の旦那に対する愚痴になって（まあ、自慢も入ってるけど）、最高に盛り上がるのは姑の悪口。

ウチはね、ざっくばらんとしてて、結構先進的な義母さんだから、へー、みんなそんなに大変なんだーって思ってて、完全に聞き役、ってゆーか、他人事だと思ってたの。

だって、あたしたち別居してるし、特に何も要求してこないし、「あなたたちは自分たちで好きなようにやってれば、それでいいんじゃない？」とかって云うヒトなのよね。孫に対してもなんにも云わないし、あたしたちの家に訪れて来ることもないし、ごあいさつに伺っても、完全にお客様扱いだもの。それどころか、住宅ローンに援助もしてくれてて。

あー、あたし、ここんちに嫁に来てよかったなあ、って思ってたの。

ところが。

確かに、旦那は微妙に実母のことを苦手にしてて、でも、お中元お歳暮、母の日とお誕生日、元旦にはきちんとご挨拶って、なんでそんなにきちりやってんのか不思議に思ってたの。

ある日、電話が掛かってきて、「旅行のお土産渡したいから、玄関先でいいからおじゃましてもいいかしら？」って云われて、あ、それだったら、と思ってる。で、玄関先でお土産渡したら、そっこー「じゃ、予定があるから」ってとっとと帰って行ったの。もちろん、その後に手土産を持って夫婦でお伺いしてちゃんとお礼も云ったのよ？

で、「今度また旅行に行くから、お土産渡しに行くわね。」って電話があったの。それを、会社から帰ってきた旦那に告げたら。

「ちょっと待ってよお。」

「どして？なんか問題でもあんの？」

「こないださ、来ただろ？」

「うん。でもホント玄関先で渡されて、忙しいから、って帰っていかれたのよ？」

「・・・あのあとさー、オレ、ケータイですげー文句云われたんだよ。」

「はい？」

「せっかく行ったのに、お茶の一杯も出さないし、って。」

「なにそれー！！！」

・・・今までは、いい人だ、って思ってたのが180度ひっくり返った。もーだめ。そんなことをハラの中で考えてただなんて、どーゆーことなの？大体、お正月もGWもお盆休みも、あたし、自分の実家に帰ったことなんて結婚以来、ほとんどないのよ？ぜーんぶ、義母さんのために、ご挨拶に伺って、自分ら夫婦も、義母さんたちに何かあった時が怖いから2人で泊りがけ

の旅行したこともないってゆーのに！

もう、友達の話も他人事じゃなくなった。だめだ、も一顔も見たくない。同居も考えてたけど、無理。

ジーザース！お前もか！・・・シャレになんないわ・・・！

「ふう」

忙しいクリスマス商戦。なんとかやりくりして休憩時間を貰った。

ユイは誰にも邪魔されない、バックヤードの喫煙スペースでため息をついてた。

タバコは止めた。吸いたいとも思わない。だって……。思わずくすり、と笑う。

だって、あれはあたしの強がりの表現方法だったもの。

あんなに頑張って就活したのに、結局どこにも就職できなくて、しかたがないからこうやって、デパートの中のショップでお洋服を売ってる。でも、それだって親には随分文句を言われた。けど、そのデパートが「一流」だったから、何とか納得してくれた。

働いてるのはあたしなのよ？ 缶コーヒー啜って、ふと考える。

そりゃ、両親にとっては不本意かもしれないけど、あたしだって必死で頑張ってるのよ？

接客業って、いろんな意味でくだらない。こんなだったら、キャバクラのほうが割がいいんじゃない？とかって思う瞬間もある。似合っていないのに、どう見たってイタいののに、「お似合いですよー、ステキ！」って。もー自分に対して、ヘドがでる。

考えてみたら、「作り笑顔」って、これ、母親に対して取得した技なんだよね。だって、そうしないと、無言で怒るんだもの。けどさー……。

半年もやってたら、ユイを指定してくれるお客様が出てきた。あたし、お世辞しか言っていない、って思うけど、でも、悪い気はしない。

仕事って、やりがいて云うか、誰かに承認されてる感じがいいのかなあ？ チーフも時々褒めてくれるし……。

そうだよな。今まで、親に褒められることだけに心血注いでたけど、他人から支持されるのって、自分の存在を許された、ってゆーか、認められたってゆーか……。

今の自分、そんなに好きじゃない。でも、嫌いじゃない。そう。嫌いじゃないの。

「ユイちゃん、ご指名よー？」

「あ、はい、すぐ参ります！」

ふふ。自分のコト、嫌いじゃないって、ちょっと気持ちいいよね？

・・・分かっているのよ。あなたがどんなに、別れてしまった奥さんを愛していたかを。いつも云うのね。

「別れたあと、相手に憎しみが浮かぶのは、本当は愛してなんかいなかったってことなんだ」って。

でも、あたしを抱いているとき、あなたが思い浮かんでいるのは、前妻のカラダでしょ？

あたしはあなたに愛されるのなら、それが欲望のはけ口だとしても構わない。どんなことをされても、あたしの、あなたへの愛は変わらないの。

あたしが絶望の底で意識を失っていた時、あなたは救いの光を与えてくれた。だから、生きるのをあきらめなかったし、あなたにもっと愛されるようにすることで、この世に生きるための理由を見つけたわ。

生きること。それは、とてつもない恐怖を伴う。でも、あたしが光の当たる場所へと伸ばした手を、あなたは捕まえてくれた。それは、極寒の地で吹雪に震えてる所に春の光を差し伸べられたのと、まったく同じだったのよ。

オンナとして生きることは、ビジネスの世界ではタブーかもしれない。でも、それは宿業のようなもので、切り捨てて生きるなんてできない。それを教えてくれたのはあなたなのに・・・。なのに、ある日突然に、消えてしまった・・・。

自分自身に、「オトナとして生きる」事を要求するのは、自虐かもしれない。でもね。あたしがあなたを愛していた、その記憶は永遠なの。

そう。多分、何十年経っても、あたしがあなたに愛されていた記憶は消えることはない。きっと繰り返し夢に見る。あなたの温もりと、愛撫の全て・・・。

けど、そこからもっと成長しなきゃいけないのよね。分かっているわ。捨てられたオンナの戯れ言にしかならないけど。

でも、愛してたの。記憶って可笑しいわね。いいことしか残らないもの・・・。

繰り返し云うわ。

あたし、あなたを本当に愛してた・・・。

t o s o o m a c c h i I l a v e y o u .

神様、あの人が、今も幸せでありますように・・・。

夢でも逢わない

・・・ああ、誰かが泣いている・・・。うつらうつらとしながら、なんとなく周囲を見回す。真っ暗な狭い部屋。その中で、女の人が泣いていた。
誰？・・・あ、あたしだ・・・。ちょっと待って、それを見ているあたしってなに？
あ、そうか。これは夢だ。でも、なんで泣いてるの？

画面が急に入れ替わる。あたしの隣にいるのは・・・、元カレだわ。あたしはこの人に捨てられた。その性格は夢の中でも変わらず、傲慢でわがままで、自己中。それに振り回されて、疲れ果てて、でも、独りになりたくないからすがり続けていた。だから、別れを切り出された時、物凄く哀しかったけど、同時に安心してた。

もう、二度とこの人のエゴに付き合わなくて済む・・・。そうやって手に入れた時間は、自分でも意外なほど、平穏で満ち足りていて、思いっきり羽を伸ばすことの気持ちよさを感じているのよね。

誰かの物でいる安心感、それと誰のものでもない自由な自分。どっちがいいのかな？ちょっと考えちゃうけど、あたしがあたしでいるためには、誰かの思惑に縛られてては、それはいらぬ鎖なんだよね。

でも、あなたの事を噂に聴くと動揺したり、それに、別れた後に、彼の友達があたしの職場にまで来て、
「よりを戻してほしい。」って云ってくるって、どういうことなの？だったら、どうしてあたしを捨てたの？

云ってたわよね？「強いあたし」が好きって。ほっといても大丈夫、でも、オレが寂しい時には寄り添って欲しいって。どんだけわがままなんだろう。あたし、がんばったのよ。強いオンナになるために。だから寂しくっても泣きつかなかったし、ベッドの中以外では、絶対に甘えなかった。その結果、あなたはあたしを捨てたんでしょ？
「おまえは重いから」って！

いいかげん、オトナになってよ？・・・そう、いつもそう思ってた。だからもう、二度と逢いたくない。あなたがどんなにみじめで哀しげだとしても。だって、逢ってしまえば、あたしの心の壁が崩れてしまう。こんなに我慢してきたのに！

だから。
もう、永遠にあなたの事を、夢でも見たくない。さようなら。これ以上あたしを引っ張って欲しくないの。
もう、夢の中でも逢いに来ないで。あたしもあなたになんか逢いにいかないから。
もう、あたしの夢にも出てこないで。